

2011.11.5

没後100年

最後のシンフォニスト

マーラー

最終回

第9番と同じ年に生まれた名曲

プログラム

昨年の生誕150年、今年は没後100年と2年に渡って特集してきましたマーラーのシリーズも第9回目、今回は最終回です。今回は交響曲「大地の歌」と最後の交響曲となった第9番で締めくくりたいと思います。

「大地の歌」は第8番と第9番の間に書かれた6曲の歌曲からなる交響曲で、生と死を意識した晩年の心境を窺わせる厭世(えんせい)感を切々と歌い上げた傑作です。これに続く第9番は1910年に完成された最後の交響曲となりました。これは、死を予感し始めたマーラーが、ベートーヴェンやブルックナーが第9番を書き上げて世を去ったことを意識して「大地の歌」に番号をつけなかったにもかかわらず、結局は第9番というジンスに負けてしまったという有名なエピソードだけでなく、第9番が特別な交響曲であることを意味しています。死への憧れと現世でのもがきは強奏和音と弱奏和音の激しい変化の中で、マーラーの人生観が凝縮されたような終楽章で感動的なクライマックスを迎えます。

今日はこの他、マーラーの第9番と同じ年に書かれたラフマニノフの前奏曲とラヴェルの「マ・メール・ロア」をお聴きいただきます。前奏曲は技巧的にも優れたラフマニノフ独特のロマンティズムに溢れた名曲。マ・メール・ロアは元々子供のために書かれたピアノ連弾用の作品ですが、バレエ用に加筆、編曲した管弦楽版もありますので、今日はその両方を用意しました。優しさと楽しさに溢れた愛らしい作品です。

2年に渡ってお送りしてきましたマーラー特集、いかがでしたでしょうか。音楽から人間臭さが滲み出てくる数少ない作曲家がマーラーではないでしょうか。どうぞ、マーラーの世界に飛び込んで、音のシャワーを浴びてみてください。

クスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲“大地の歌”

1. 大地の哀愁を歌う酒の歌 ~ 6. 告別 から

ブリギッテ・ファスベンダー(メゾ・ソプラノ) / フランシスコ・アライサ(テノール)
カルロ・マリア・ジュリーニ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1984.2.14 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

セルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943):

13の前奏曲 op.32 ~

第5番ト長調 op.32-5 / 第13番変ニ長調 op.32-13

モーラ・リンパニー(ピアノ)
(1993.10.24 サントリーホールでのLive)

モーリス・ラヴェル (1875~1934):

組曲“マ・メール・ロア”

第1曲“眠りの美女のパヴァーヌ” / 第5曲“妖精の園”

ピエール・ブーレーズ指揮ロンドン交響楽団
(1995.5.26 サントリーホールでのLive)

第2曲“一寸法師” / 第3曲“パゴタの女王レトロネット” / 第4曲“美女と野獣の対話”

マルタ・アルゲリッチ(ピアノ) / 伊藤京子(ピアノ) (ピアノ連弾)
(1994.1.16 昭和女子大学人見記念講堂でのLive)

*** 休憩 ***

クスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第9番ニ長調 ~

第1楽章から、第2楽章から、第3楽章から、第4楽章

レナード・バーススタイン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1979.10.4 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)